

満洲の現地人向け中国語教科書における 「メロスの伝説」

池田 匡史

1. 問題の所在

植民地教育研究において、「国語」教育に関する領域では様々なレベルで、教科書教材に着目した研究がなされてきた（酒井，2012；金，2018；竹中，2000；竹中，2002）。言語が民族のアイデンティティ形成に結びついていることを踏まえれば、その実態を検討することで、植民地に対するイデオロギー形成がいかになされたのかを明らかにできると考えられてきたからである。

たとえば、日本の植民地であった朝鮮や満洲などでは、内地あるいは他の植民地と共通した教材が教科書に使用されてきたことが明らかにされている（竹中，2002）。しかし、植民地間に共通する教材が使用されたというような表面的なものからだけでなく、「教材の具体的な表現やプロットの増減等、教材の細部になされている変更にも、イデオロギー形成、同化への志向の有無が現れている可能性がある」（池田・黒川，2021：70）という前提から、教材テキスト内部からも、そこに潜むイデオロギーに関わる何らかの特徴を明らかにすることで植民地教育の性格を窺うことの重要性が指摘されてきている。その例として、植民地「国語」教科書における民話教材をめぐる様々な類話と当該教材との比較を行うことの重要性を指摘する研究がある（黒川，2016；池田・黒川，2021；池田・黒川，2022）。しかしながら、そのような研究にあっても、植民地の「現地人学習者対象の現地語教科書」（池田，黒川，2021：81）を検討の対象に入れることなど、多くの課題が残されているのが現状である。

ところで、この現地人学習者対象の現地語教科書の教材として、注目すべきものに、満洲の中国人向けの中国語教科書である南満洲教育会教科書編輯部編『新時代国語読本初級用第五冊』（1931年）に収録された「眞知己」という教材がある。これは、「太宰治の「走れメロス」の源泉であり、古代ギリシャを起源とする逸話にダモンとペンティアスの話がある。」（佐野，2021：132）とされるものの一端にあると考えられるものである。

そもそもこれまで文学研究、国語教育研究などの領域では、太宰治の「走れメロス」が何を源泉としていたのかを明らかにしようとする営みが展開されてきた（小野，1973；奥村，2017；佐野，2021）。これら「メロスの伝説」（佐野，2021）に関する作品群の日本における展開には、佐野幹（2021）が、次のように説明したようなものがあったとされている。

ダモンとピンティアスの話が日本に流入してきたのは明治4年のことである。修身口授用のテキストである『泰西勸善訓蒙』で紹介されて以後、明治後期には『フェイマスストーリーズ』やシラーの人質等によって繰り返し語られつづけた。大正には鈴木三重吉の「デイモンとピシアス」が登場し、その後の昭和15年に「走れメロス」が発表されるのである。このように見ていくと「走れメロス」は、語り継がれてきた伝承の一つの話であったと捉えることができる。(p.132)

このような背景から、奥村淳(2017)は、「日本における〈ダモン〉話の軌跡をたどり、次にその歴史における「走れメロス」の位置を考察」(p.39)した。ここでは、合計166の書誌における〈ダモン〉話の情報を提示している。また佐野幹(2021)では、これらを「メロスの伝説」テキスト群とし、「同じ「信実」をテーマとして扱っていてもその意味内容は語り方の違いによって変化する」(p.137)との前提¹に立ち、太宰による「走れメロス」発表以前に日本に普及していた代表的なテキストの記述項目を比較している。テキストの記述内容の比較という点で、極めて重要な研究である。

ただし、奥村は〈ダモン話〉について「その将来的な数は不明である。」(p.66)としたように、多くの存在が想定されていることもあり、これらの「メロスの伝説」研究においては、『新時代国語読本』『真知己』が検討対象に入っていない。特に植民地教育において、「国語」教材の本文の改変がイデオロギーに関わる営みという特殊性のあるものであったことを指摘する研究(池田・黒川, 2021)を踏まえると、この教材においても同様の展開があった可能性が示唆される。

以上のことから、本稿では、満洲の中国人向けの中国語教科書に掲載された「真知己」の特徴、「メロスの伝説」としての位置づけについて検討する。

2. 研究の方法

本稿ではまず、「メロスの伝説」に関わる先行研究を整理することで、『新時代国語読本』『真知己』が「メロスの伝説」テキスト群のうち、どのような系統に位置するのかを確認する。これに加えて、満洲における中国語教科書教材一般の特性を確認する。これらを踏まえた上で、『新時代国語読本』『真知己』の内実を検討する際の手立てを検討し、実際にその教材本文の性格や特徴を明らかにする。

3. 先行研究との関連

3.1. 「メロスの伝説」群の研究

先にも示したように佐野（2021）は、「場面と人物の描写の相違点を軸にして見ていくと「走れメロス」の特徴が理解しやすくなる」（p.137）という前提に立ち、「メロスの伝説」群を34のプロットに分け、その有無を整理した表を作成した。その際に検討対象としたのは、「A「朋友ノ友」（箕作麟祥訳述『泰西勸善訓蒙』（1871年））B「ダモンとフィシアス」（ジェームズ・ボールドウィン『フェイマスストーリーズ』（1896年））C「約束せば必ず遂げよ」（坪内雄蔵『中学修身訓』（1906年））D「眞の知己」（文部省『高等小学読本』（1910年））E「デイモンとピシアス」（鈴木三重吉『赤い鳥』（1920年））F「人質」（小栗孝則訳『新編シラー詩抄』（1937年））」（p.133）の六つである。佐野はこれらを代表的なテキストとした上で、それぞれのプロットの有無を比較する分析をおこなっている²。これらの中で、本稿で取り上げる『新時代国語読本』「眞知己」と、そのタイトルから関連が窺えるために、比較対象とすることで本稿の目的の達成が想定されるのが、「眞の知己」（文部省『高等小学読本』（1910年））である。

「眞の知己」は、第二期、第三期国定国語教科書に採択されてきた教材³であり、「太宰が組合立明治高等小学校時代（大11）にこれを習い、その記憶が長じて「走れメロス」へと結実したという想定」（近藤，2001：28）がなされているものである（小野，1973；佐野，2021）。

3.2. 「メロスの伝説」群と満洲・帝国日本

ところで、これらの「メロスの伝説」群について、本稿で検討対象とする教科書が使用された満洲及び帝国日本との関連については触れておく必要がある。

「彼の満洲事變に際し聯盟理事會が日本の撤兵先決を強要した態度の如きは吾人の最も考ふべき點ではあるまいか、本書は時局の重大なるに鑑み洽く青年子弟の士氣を鼓舞し國防思想の涵養に資せん爲」（軍事教育研究会編，1932：1-2）という意図や目的のもとに編まれた書籍である『國の礎』に〈ダモン話〉が掲載されていることを示した奥村（2017）が、「〈ダモン話〉は「臣民」が「皇室と国家」のために「一切を」犠牲にすることの象徴となつたのである。」（奥村，2017：61）と指摘したように、「メロスの伝説」は満洲事變、ひいては帝国日本の時代状況との関係で捉えられていた文脈があった。これは、濱森太郎（1999/2001）が次のように、「走れメロス」の読みを満洲における社会状況と関わらせながら展開していることとも通じるものがある。

ディオニスにも、嘲笑されるだけの失点が無かったとは言いきれない。もともといずれの国家でも、非常時を生きる將軍達は、概ね独得の才能

を發揮して、表向きはディオニスのように、「わしだつて、平和を望んである」と弁解しつつ、熱心に熱戦を拡大する。例えば、昭和三年六月四日の張作霖事件でも、昭和六年九月十八日の柳条湖での鉄道爆破事件でも、將軍達は自ら中国軍を挑発しながら、「自衛手段」と称して中国を占領したのではなかったか。(濱, 2001: 367)

特に近藤周吾(2001)は、国定国語教科書教材「眞の知己」と「走れメロス」の本文の関係性を比較検討しているが、その理由として、「ある一つの〈話型〉が時代や権力の価値体形をある意味で反映してしまうことがあるということの例証となるから」(p.28) というものを挙げている。具体的には、「眞の知己」において「王殺害未遂の罪が「或罪」とぼかされている」(p.31) ことや、最後の場面において「[心の奥の奥から]王を喋らせることで王の邪知暴虐性を消し王の人徳を示す」(p.33) ことなどが試みられているとしている。これらの特徴は、近藤が次に示すことを避けるためであったことを示唆している。

当時は〈王様を殺す〉という単純な表現さえも実は〈天皇制〉の問題として読み換えられるコードがあったということと関わっていよう。つまり、王とは〈天皇〉にほかならず、それを殺害しようとすることは〈不敬〉なことであるという読みを喚起してしまう可能性があるということにほかならない。(p.32)

ただし、本稿で検討対象となっているテキストは、読者想定が日本人ではなく、中国人である。そこにどのような面での異なりが想定されるのかは、満洲における中国人教育を取り巻く状況を確認する必要がある。

3.3. 満洲における中国人教育

満洲教育会教科書編集部編『新時代国語読本』は、1931年に発行された中国人用の中国文教科書である。それ以前の満洲における中国人教育では、日本にとって満洲は、特別な権益のある土地ではあるものの、領土とは認められていないという特殊性への配慮もあり、中国が編集した教科書を用いていた。これは、「満鉄の教育方針は極端な同化主義を排して中国人を中国人として教育しようという」(槻木, 1974: 125) 方針が背景にあった⁴。しかしその中国編集の教科書内容が、政治情勢から「三民主義の内容を含む排日的教材が多く使用されるように」(竹中, 2000: 325) なったことなどもあり、満鉄は中国の教科書を使用するのではなく、独自に編纂していくという展開となった。そこで、初等教育研究会第二部で開かれた教科書編纂委員会で、中国文教科書を奉天公学堂、瓦房店公学堂、撫順公学堂が担当し編纂すると

いう運びとなった（竹中，2000：327）。

そのような中で編纂された『新時代国語読本』は、「満鉄付属地における最初の独自教科書」（竹中，2005：196）である。これは竹中（2005）によると、商務印書館による「『新時代初級小学国語教科書』（一九二七年）の「不适当教材」を削除した」もの（p.199）とされているが、そこに本教材は見当たらない。時代の前後関係から考えて、本稿 1. および 3. 1. で確認したように、文部省『高等小学読本』『真の知己』からの影響を受け、持ち込まれたものと考えられる。

4. 『新時代国語読本』『真知己』の性格

4. 1. 教材本文の概括的特徴

まず、『新時代国語読本』における「真知己」の全体的な特徴や性格を捉えることとする。「真知己」の本文を以下に示す。なお本文テキストは、竹中憲一編（2005）に依拠した。

四十四 真知己

意大利人弼周斯、因得了罪、被國王宣告死刑。弼周斯想再見他的老父母一面、死也安心。因懇求國王許他歸家一行、等到行刑的時期、一定回來。國王不允他的懇求。弼周斯有一個最好的朋友、叫做達蒙、向國王說道。「我是弼周斯的好友。我知道他決不是食言的人、望陛下允許他的懇求！陛下若不信他、可將我下獄。萬一他至期不來、我願替他受刑。」國王很感動就允他的懇求、把達蒙下了獄。

行刑的時期快到了、可是不但弼周斯沒有來、連消息也沒有。達蒙到了這時候、也只好待死。

到終行刑的那天、弼周斯還不見到。獄卒便把達蒙提到刑場、等候行刑、他的性命將要不保了。忽然看見一人急急的跑到、這人不是別人、就是弼周斯原來他道上遇風、故此遲到。急看達蒙還活著、歡喜的了不得便把立刻要死的念頭、都忘了。趕快跑到國王面前去報到。

國王看見了他兩人這樣重的信義、大為感動、便赦了弼周斯的死罪、心中暗暗的嘆道。「我若有這樣的一個真知己、無論國王怎樣富貴、怎樣榮華、我都可以不要。」

本教材について、竹中編（2005）は、教科書の復刻版を刊行する際、編者による日本語訳をつけて提示している。ただし、ここで示された訳では、主要登場人物である「弼周斯」を、「メロス」と当てている。角田旅人（1983）が「走れメロス」の源を探る際に、その登場人物の名付けを問題にしたよう

に、教材の内容的性格を検討する際には、登場人物の名前の変更に十分注意せねばならない。

この点について、「彌周斯」は北京語で [bizhōusi] と発音する⁵ため、「メロス」よりもむしろ、国定教科書である『高等小学読本』での人物名のように「ピチウス」と表記して捉える方がより妥当であろう⁶。すなわち、竹中の訳には、太宰による「走れメロス」の影響を無自覚に受けていると捉えられるのである。そのため、竹中編（2005）の日本語訳は、本稿における訳として採用しがたい。そこで、稿者による日本語訳を示すと次のようになる。

四十四 真の知己

イタリア人のピチウスは、その罪によって、国王から死刑宣告をされました。しかし、ピチウスは老いた両親に再会して、安らかな心で死にたいと願いました。そこで王に、処刑のタイミングが来たら、またここに帰ってくるので、故郷に帰ることを許可してほしいと懇願しました。王はその願いを聞き入れませんでした。ピチウスにはダモンという親友がいて、彼は王にこう言いました。「私はピチウスの良い友人です。彼は約束を破るような人ではありません。陛下、彼の要求を許可してください！もし陛下が彼を信じられないのなら、今私を牢屋に入れてもらっても構いません。万が一彼が帰って来なければ、私が彼に代わって刑を受けます。」王はとても感動し、その願いを聞き入れ、ダモンを牢屋に入れました。

処刑の時が来ましたが、ピチウスは来なかったばかりか、何の知らせもありませんでした。このとき、ダモンは死ぬのを待つしかありませんでした。

処刑の日、ピチウスは帰って来ませんでした。そこで看守はダモンを処刑場に連れて行き、処刑されるのを待ちました。今まさに彼の命が失われようとしていたのです。すると突然、一人の男が急いでやって来るのが見えました。その男は、途中で暴風に遭遇して遅れてしまったピチウスにはほかなりませんでした。ダモンがまだ生きているのを見たとき、嬉しさのあまり、自分の死がすぐそこに迫っていることなど、まったく忘れてしまっていました。彼は王のもとに駆けつけ、報告しました。

王は彼らの信義の厚さを見て、とても感激したので、ピチウスの死罪を赦すことにし、心の中でひそかに「私にこんな親友が一人でもいたら、国王がどんな富や立派な栄華がある立場だとしても、王でなくても良いのに。」と嘆いたのでした。

本教材について、先にも示した佐野の作成したプロットの比較表における『高等小学読本』の「真の知己」の項の整理をもとに、稿者が『新時代国語

読本「真知己」の展開を加筆したものが、次の表1である。なお、佐野はプロット比較の際、ある記述の有無を「○」「×」で示すとともに、「有るとも無いとも言えないグレーゾーン」(p.138)として「△」というカテゴリを加えて設けている。稿者もこれに沿って加筆している。加えて、『高等小学読本』と『新時代国語読本』との間に異なりが認められる箇所、網掛けを施してある。

〈表1〉「真の知己」と「真知己」のプロット比較

記述の項目		「真の知己」 （『高等小学 読本』）	「真知己」 （『新時代国 語読本』）
□物語 の外部 の記述	①教訓	○	×
	②ディオニスのエピソード	×	×
	③ピタゴラス学派の説明	×	×
	④原典の表示	×	×
□物語 内の場 面及び 人物の 描写	⑤メロスが捕まる経緯	○	○
	⑥メロスが市に来る	×	×
	⑦市の様子と王について質問する	×	×
	⑧捕まる	×	×
	⑨メロスと王の問答	○	○
	⑩メロスとセリヌンティウスとの対面	×	×
	⑪メロスが村で妹の結婚式を挙行	×	×
	⑫メロスの帰路	△	△（更に少）
	⑬濁流を泳ぎ切る	×	×
	⑭強盗（山賊）と戦う	×	×
	⑮太陽の灼熱で動けなくなる	×	×
	⑯悪い夢を見る	×	×
	⑰清水で元気（希望）を取りもどす	×	×
	⑱太陽の十倍早く走る	×	×
	⑲不吉な会話を小耳にはさむ	×	×
	⑳フィロストラトスが止めに入る	×	×
	㉑セリヌンティウスの獄中	○	△
	㉒ディオニスが警備を厳重にする	○	×
	㉓メロスをかばい、信じる	○	×
	㉔ディオニスが嘲る	×	×
	㉕メロスの帰還	○	○
	㉖処刑の願い出	○	○
	㉗メロスとセリヌンティウスが再会する	△	△
	㉘メロスとセリヌンティウスが殴り合う	×	×
㉙ディオニスの感動	○	○	
㉚ディオニスが2人を許す	○	○	
㉛ディオニスが2人に交友を願い出る	×	×	
㉜人々の反応	×	×	
㉝群衆が歓声をあげる	×	×	
㉞少女が緋のマントをメロスに捧げる	×	×	

ここからは大部分のプロットの有無に異なりはないことが窺える。ただし、いくつかのプロットに、欠落または希薄化という方向での異なりが認められる。

以降では、ここで網掛けが施されることになった「①教訓」、「⑫メロスの帰路」、「⑭セリヌンティウスの獄中」の三つのプロットにおける欠落・希薄化に着目し、それぞれのプロットにおける表現の具体を検討する。

4.2. 「教訓」の欠落

まず、「教訓」について、佐野は「[A]朋友の交」、「[B]約束せば必ず遂げよ」と「[D]真の知己」（中略＝稿者）では、道徳的規範の具体例としてこの物語が利用されているため、話の前や後ろには、教訓が示されている」（佐野，2021：138）と述べている。このうち、『高等小学読本』では、次のようなものが冒頭に表現されている。

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち、手を執つて、互に談笑するが、一旦利害相反すれば、忽ち仇敵となるやうな者は眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。

この冒頭において読者は、「[相信じて疑はない]」ことが主眼の物語内容がこれ以降に展開される」という読みの方向づけがなされることになる。いわば、物語の順序としてまず「信実」が前面に打ち出されているのである。一方で『新時代国語読本』ではこの教訓がなく、冒頭からピチウスに死刑宣告がなされるというところから物語内容が始まることになっている。これにより、『新時代国語読本』において「信実」という要素は薄いものとなっているといえる。

4.3. 「メロスの帰路」の希薄化

次に、メロスの帰路について、『高等小学国語読本』の記述内容を、佐野は「△」と評価している。教材の該当箇所は、次の内容である。

此の時早く彼の時遅く、ピチウスは息も絶え絶えになつて、かけこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に遅れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた悪名を後の世に傳へると思へば、立つても居ても居られない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。

このうち、前半の二つの文は、『新時代国語読本』でもほぼ同様の内容が語られている。しかしながら、後半の一文で語られている、ピチウスの絶対

に遅れてはならない理由、およびダモンのもとへの到着が遅れてしまうことに対する心情は、『新時代国語読本』に認められない。この場面は、ピチウスという親友の無事をつかみ取らねばならない、そしてお互いを信じて疑わない親友という存在との約束は絶対に守らねばならないという教訓性も強く読み取れるものといえる。しかし、『新時代国語読本』では、その記述が認められないのである。この欠落は、前項で確認したものと同様に、『新時代国語読本』において「信実」という要素が薄まっていく機能を果たすものと考えられよう。

4.4. 「セリヌンティウスの獄中」の欠落

最後に、「セリヌンティウスの獄中」についてである。『高等小学読本』では、次のように、もしピチウスが帰ってこないとしても不慮の事故の影響に違いないこと、死ぬ覚悟を決めてもピチウスに対する信用は変わらないこと、信愛する友人のために死ぬことが語られている。

ダモンも今は是までと死ぬ覚悟を極めた。彼の親友に對する信用は更に變らない。彼は又言つた。

今こゝで殺されるのは最も信愛する友人の爲である。少しも恨むことはない。

この場面は、ダモンとピチウスが「一貫してお互いを信じ合っていた（中略＝稿者）大きな見せ場として存在している」（佐野，2021：140）ものとされる、重要なものである。

一方で『新時代国語読本』においては、ダモンが獄中でどのようなことを考えていたのかが窺い知れる表現は全くない。「也只好待死。（死ぬのを待つしかありませんでした。）」と、客観的に捉えられる状況が語られているのみである。つまり、ここでも冒頭の教訓の非明示、あるいは帰路の描写の欠如と同様、「信実」という要素が薄いものとなっているのである。

4.5. 『新時代国語読本』「眞知己」の性格

ここまで検討した『高等小学読本』「眞の知己」との比較によって垣間見える『新時代国語読本』「眞知己」の性格を整理する。ここまで、確認したように、『新時代国語読本』「眞知己」の相対的な特徴からは、総じて「信実」という面が薄くなる機能につながっていた。

ではこのような教材中の徳目的、訓育的要素の希薄化という特徴を、植民地の現地人教育という点からどのように位置付けられるであろうか。参考となる研究に、池田匡史・黒川麻実（2021）がある。池田・黒川では、満洲における日本人対象の国語教科書、在満中国人対象の日本語（国語）教科書、朝鮮における朝鮮人対象の国語（日本語）教科書に共通して採録された民話

教材の性格を検討した際、在満中国人対象の民話教材には、「不遇な状況下を前提として訓育的内容を与えようとする意図も垣間見える」(p.81)ものの、基本的には「単なる笑話に過ぎない教材が多く認められるなど、訓育的な内容を薄めようとしていた」(p.81)ことを指摘し、これが中華民国への配慮によるものとしている。これは、外国語としての日本語を学習するための教材であるからこそ、思想等を強調するようなものよりも、言語の実用的な側面を押し出そうとしたものと捉えられ、本稿3.3. で確認したこととも通ずる。しかしながら、学習者にとっての母語教育の教材である「真知己」にあっても、これと同様のことが反映されていることは、注目すべきものといえよう。つまり、「訓育的な内容を薄めよう」とする向きは、「国語(=日本語)教育だけを対象としたものではない可能性が窺えるという点で、「真知己」は示唆に富むものと捉えられるのである。

5. 結語

以上、満洲における中国人向け中国語教科書に掲載された教材「真知己」の「メロスの伝説」テキスト群における性格を検討してきた。そこでは、「信実」という教訓性が薄められているという特徴があることが明らかになった。

これまでの研究で、植民地「国語」教科書教材の本文において戦略的な改変があったことが示唆されてきたが、現地人用教科書である満洲の中国語教科書においても、同様の営みがあった可能性が示唆された。しかし本稿で扱った「真知己」以外の教材でなされた戦略的な改変を検討し、その可能性について評価しなければならない。そのため今後にあっても、十分に展開されているとは言いがたいこのような現地語教科書教材の本文の改変の姿を明らかにする営みを積み重ねていく必要がある。

注

- 1 佐野は、「メロスの伝説」の諸テキストが収録されていた書誌の性格等から、次に示すような性格を見ている。

大きく言うと、「走れメロス」より前に流通していた「メロスの伝説」のテキスト群は、それを読む読者をして、信実、友愛、約束、信義といった他者との規範意識を身につけさせるという道德上の目的を背負ってきたのである。(p.136)

- 2 種々のテキストの系統については、奥村(2010)が、「[高等小學読本 卷一]の「眞の知己」(中略=稿者)はJames Baldwinの“Fifty Famous Stories”に収められている“Damon and Pythias”が元になっている。(中略=稿者)「富」との交換が言われるのはBaldwin系統だけと言ってよ」(pp.64-65)いとしている。この点において、本稿で検討する『新時代国語読本』「真知己」も同系統にあるといえる。

- 3 近藤 (2001) では、当時の教師用指導書から、「当時の教育実践においては〈友情〉という徳目の大切さを伝えることが重視されていた」(p.30) ことを指摘している。
- 4 この点については、日本語教育のスタンスが顕著なものとされている。竹中 (2019) では、植民地の現地人教育という観点からの満洲の特徴について次のように指摘している。

台湾、朝鮮においては強力な武断政治をもって同化教育が行われたが、満州、とくに満洲国成立前に、関東州、満鉄付属地においては、(中略=稿者) 中国の教育政策をある程度尊重しつつ、日本語教育を軸としながら日本の政策を少しずつ浸透させようという教育であった。(p.1)
- 5 満洲における標準発音については、「北京語を標準音とする中国の教科書を使用している関係もあり、北京語を標準音とする教育が行われるようになった」(竹中, 2000: 147-148) とされている。本教科書が発行された直後に満洲国が成立して以後は中華民国との関係を断つために、「新京(長春)地方の方言を標準音とした」(竹中, 2005: 203) ことなどが知られている。
- 6 現代において中国で発売されている「走れメロス」の翻訳書において「メロス」は、例えば「美乐斯」や「梅洛斯」などと表記されている。

参考引用文献

- 池田匡史・黒川麻実 (2021) 「植民地〈国語〉教科書における民話教材の位相—満洲・朝鮮に着目して—」『読書科学』62(2), 70-84.
- 池田匡史・黒川麻実 (2022) 「植民地間に共通する「国語」教科書民話教材—朝鮮・満洲・南洋群島の「水中の玉」—」『国語科教育』92, 59-67.
- 奥村淳 (2010) 「太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性」『山形大学紀要(人文科学)』17(1), 39-78.
- 奥村淳 (2017) 「太宰治「走れメロス」について—日本における〈ダモン話〉の軌跡—」『山形大学紀要(人文科学)』18(4), 39-72.
- 小野正文 (1973) 「『走れメロス』の素材について」『郷土作家研究』10, 1-8. (山内祥史編 (2001) 『太宰治『走れメロス』作品論集 近代文学作品論集⑧』東京堂出版, 54-68.)
- 角田旅人 (1983) 「『走れメロス』材源考」『香川大学一般教育研究』24, 1-18. (山内祥史編 (2001) 『太宰治『走れメロス』作品論集 近代文学作品論集⑧』東京堂出版, 122-144.)
- 金広植 (2018) 「文部省及び朝鮮総督府教科書に収録された昔話・神話教材の比較研究」『昔話伝説研究』37, 138-150.
- 黒川麻実 (2016) 「『民話』教材と国語教科書を巡る問題の検討—「民話」の性質に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部』65, 73-82.
- 軍事教育研究会編 (1932) 『國の礎』聚文館
- 近藤周吾 (2001) 「『走れメロス』の〈話型学〉—典拠・教科書・解釈—(前)」『日本近代文学会北海道支部会報』4, 10-35.
- 酒井恵美子 (2012) 「台湾・朝鮮植民地国語教科書の比較—大正・昭和初期教科書

- の現地採集の教材について」『社会科学研究』32(2), 351-369.
- 佐野幹 (2021) 「『メロスの伝説』の中の「走れメロス」」『読書科学』62(3・4), 132-143.
- 竹中憲一 (2000) 『『満州』における教育の基礎的研究第3巻中国人教育③』柏書房
- 竹中憲一 (2002) 「解説「満州」における日本語教科書の変遷」竹中憲一編 『『満州』植民地日本語教科書集成7』緑蔭書房, 389-442.
- 竹中憲一編 (2005) 『『満州』植民地中国人用教科書集成4』緑蔭書房
- 竹中憲一 (2005) 「解説「満州」における中国人用教科書の変遷」竹中憲一編 『『満州』植民地中国人用教科書集成8』緑蔭書房, 139-360.
- 竹中憲一 (2019) 『満州教育史論集』緑蔭書房
- 槻木瑞生 (1974) 「日本旧植民地における教育—1920年代の「満州」における中国人教育を中心として—」『名古屋大學教育學部紀要教育學科』20, 121-133.
- 濱森太郎 (1999) 「『走れメロス』の着想について—秘匿された物語の論理—」(山内祥史編 (2001) 『太宰治『走れメロス』作品論集 近代文学作品論集⑧』東京堂出版, 359-380.)

(本学研究科・学部 教員)